

二人はめいめいの部屋に引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かなことは朝と同じでした。私もじっと考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。しかしそれにはもう時機が遅れてしまったという気も起こりました。なぜさつきKの言葉を遮って、こっちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手抜かりのように見えてきました。せめてKの後に続いて、自分は自分の思うとおりをその場で話してしまつたら、まだよかつたろうにとも考えました。Kの自白に一段落がついた今となって、こっちからまた同じことを切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切りのふすまを開けて向こうから突進してきてくれればいいと思いました。私に言われれば、さつきはまるで不意打ちに遭つたも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったのです。私は午前失つたものを、今度は取り戻そうという下心を持っていました。それで時々目を上げて、ふすまを眺めました。しかしそのふすまはいつまでたつても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

そのうち私の頭はだんだんこの静かさにかき乱されるようになってきました。Kは今ふすまの向こうで何を考えているだろうと思うと、それが気になってたまらないのです。ふだんもこんなふうにお互いが仕切り一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あつたのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったので、そのときの私はよほど調子が狂っていたものと見なければなりません。それでいて私はこっちから進んでふすまを開けることができなかつたのです。いったん言いそびれた私は、また向こうから働きかけられる時機を待つより外にしかたがなかつたのです。

しまいに私はじっとしておられなくなりました。無理にじっとしていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私はしかたなしに立つて縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶の湯を湯飲みについて一杯飲みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの部屋を回避するようにして、こんなふうに自分を往來の真ん中に見いだしたのです。私には無論どこへ行くという当てもありません。ただじっとしていられないだけでした。それで方角も何もかまわずに、正月の町を、むやみに歩き回つたのです。私の頭はいくら歩いてもKのことではいっばいになっていました。私もKを振るい落とす気で歩き回るわけではなかつたのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼しながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解し難い男のように見えました。どうしてあんなことを突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明ければいられないほどに、彼の恋が募ってきたのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、全て私には解しにくい問題でした。私は彼の強いことを知っていました。また彼の真面目なことを知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くを持つてしていると信じた。同時にこれから先彼を相手にするのが変に気味が悪かつたのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の部屋にじっと座っている彼の容貌を始終目の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いて彼を動かすことは到底できないのだという声がどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼にたたられたのではなかるうかという気さえしました。

私が疲れてうちへ帰ったとき、彼の部屋は依然として人気がないように静かでした。